

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	フランス革命検死報告書 : 『ダントンの死』
Author(s)	武田, 智孝
Citation	広島ドイツ文学 , 32 : 1 - 20
Issue Date	2020-01-15
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048538">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048538</a>
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



## フランス革命検死報告書：『ダントンの死』

武田 智孝

### はじめに — 「宿命論書簡」の重み

フランス革命に題材を取った歴史劇『ダントンの死(Danton's Tod)』は「恐怖政治(la Terreur)」末期、1794年3月末から4月初め、ダントン率いる「寛容派」がロベスピエールらジャコバン党強硬派によって逮捕・処刑されるまでの一週間余りの時期を扱っている。直前の3月24日には極左のエベール派十数名がギロチンに掛けられたばかり。ここで粛清する側にあったロベスピエールやサン・ジュストも7月末(テルミドール9日)に逮捕、翌日に処刑される。タイトルロールのダントンは革命運動にもはや意味を見出し得ず、行動への意欲を失ってしまったかつての革命家、抜け殻にすぎない。

ビューヒナーは何故このような題材を選んだのだろうか。

と言うのも、『ヘッセンの急使(Der Hessische Landbote)』(以下『急使』)、「あばら家に平和を! 王宮に戦争を! (Friede den Hütten! Krieg den Pallästen!)」(S.85)<sup>1</sup>で始まる扇動的パンフレットの起草は1834年3月、ドラマよりほんの9カ月ほど前のこと(同志らによる配布は同年7月)にすぎない。とうてい同一人物の筆になるとは思えないほど傾向が違っている。

『急使』ではヘッセン大公国における徴税と支出の具体的な数値を挙げて、世襲の王侯貴族らによる領民搾取の不条理極まる実態を告発し、蜂起を促した。1789年フランス人民はこのような状況を覆すべく立ち上がり、王政を倒し、人権宣言を発し、共和制を打ち立てた、ドイツの民もこれを見習うべきである、と。扇動的パンフレットには当然フランス革命についてポジティブなことしか書かれていない。確かに、その後ナポレオンの軍事的栄光に目の眩んだフランス国民がこの独裁者に王冠を差し出し、革命の成果である共和制を投げ捨て、その結果ロシアでの惨敗、王政復古といった罰を以後30年にわたって受けねばならなかったことを書いてはいる。しかし革命の闇の部分に関してこのパンフレットは一切触れていない。

---

<sup>1</sup> Georg Büchner Werke und Briefe, Münchner Ausgabe, Hrsg. von Karl Pörnbacher usw. München 1988, S. 85. 以後同書よりの引用は(S. 数字)をもって示す。

『急使』配布後、盟友の逮捕、彼自身も尋問を受け、指名手配されて亡命を余儀なくされるといった体験が、政治活動を断念して自然科学研究や執筆活動に向かうきっかけになったことは確かである。その機会に、体制変革を目指す政治活動家として言及を避けたこと、文学的人間として真剣に向き合わずにおれなかった。想定される読者層もまるで違う。パンフレットは中下層の庶民に配られ、ドラマの宛先は知識人である。地下活動家から作家へ、扇動から省察へという変化は自然の流れだったのかもしれない。

だが、それにしても、何故よりによって暗黒の恐怖政治末期、革命が最も輝きを失いつつあった、粛清に次ぐ粛清の内部抗争の時期を、そして、積極的的革命行動を諦めてしまったダントンのような人物を、中心に据えた歴史劇を書かねばならなかったのか、という疑問は消えない。

ストラスブール大学遊学中のビューヒナーは 1833 年友人に宛ててドイツの政治状況を、民衆と王侯貴族とリベラル派によって演じられる「猿芝居(Affenkomödie)」と断じ、非道な権力者たちを麻縄で街灯に吊るすことを夢見ていると書いた。(S.285) 当時のビューヒナーは „idolâtre de la révolution“ (Vergötterer der Revolution) と評されるほど熱烈な革命支持者だった。<sup>2</sup> 規則によってギーセン大学に移ることを余儀なくされた後も、ストラスブールで知った秘密結社「人権協会(Société des droits de l'homme)」に倣って、大学都市ギーセンと故郷の首都ダルムシュタットにその支部にあたる地下組織「人権協会(Gesellschaft der Menschenrechte)」を立ち上げ、主導して、あの扇動的パンフレットを起草したのである。

たとえ地下活動『急使』の試みが密告によって挫折したとしても、いや、そうであればなおのこと、自由のため、旧体制打倒のために闘いを挑む革命家を主人公とする壮絶な悲劇を書いてもおかしくはなかったはずである。何故そうならなかったのか。

問題となるのは1834年1月半ば<sup>3</sup>に彼が婚約者に宛てて書いた„Fatalismusbrief“ (宿命論書簡)と呼ばれるものである。

革命の歴史を熱心に読みました。歴史を支配するぞっとするような宿命論に打ちひしがれる思いでした。人間の本性は恐ろしいほど変わらず、人間の置かれた状況には抗しがたい力が支配し、何人もそこから逃れられませぬ。個々人は波に浮かぶ泡であり、偉大な人物など偶然の産物、天才なんて操り人形、鉄の法則に抗う笑劇、このことに気付くのが関の山、それをどうこうするなど不可能です。(中略) つまづきは避けられない、つまづきをもたらす者は不幸である<sup>4</sup>(Der Ausspruch: es muß ja Ärgernis kommen, aber

<sup>2</sup> cf. Dedner, Burghard. Georg Büchner, ein „Vergötterer der Revolution“ (Juni 2014/Dezember 2015), zuletzt bearbeitet: Januar 2017 (Georg Büchner | PORTAL) <http://buechnerportal.de/aufsaeetze/georg-buechner-ein-vergoetterer-der-revolution>

<sup>3</sup> Pörnbacher 編集の München 版では 1834 年 3 月 9 日～12 日とされているが、現在は 1 月半ばとする説が有力である。

<sup>4</sup> マタイによる福音書第 18 章 7 節。引用は新共同訳聖書による。

wehe dem, durch den es kommt, – ist schauderhaft.) というのは --- 身の毛のよだつ言葉です。ぼくたちの中であって嘘をつき、殺し、盗むのは何なのか? [傍点引用者](S.288)

1月半ばのこの書簡からわずか2ヶ月後に『急使』が起草されることから、扇動的パンフレットと宿命論書簡との整合性がたびたび問題にされてきた。社会革命的な『急使』の方を重視するドイツの学者たちは、ビューヒナーが当時「熱心に読んだ」書物がThiers, Mignetといった「宿命論学派(école fataliste)」と呼ばれる歴史家たちのもので、読後の強い影響下で書かれた手紙である<sup>5</sup> とか、恋人の住む自由なストラスブルを離れて窮屈なギーセン大学への転学を余儀なくされたため、憂鬱状態<sup>6</sup> に陥り、その谷間で書かれたのがこの書簡であって、3月になるとフランクフルト警備本部襲撃事件(1833年4月)で拘束されていた青年たちが釈放され、彼らとの新たな交流が積極的政治参加へと気分を高揚させて『急使』起草へと彼を向かわせたのだとする見方とかがある。<sup>7</sup> ビューヒナー研究の第一人者Burghard Dednerも同じく憂鬱を強調し、人類の進歩を信じてやまなかったビューヒナーが宿命論者などではありえなかったと強く主張する。<sup>8</sup> 従来の研究は総じて「宿命論書簡」の比重を極力小さく見ようとする点で一致している。

しかしこの手紙のさわりの部分がドラマのテキストにほぼそのまま、しかも主人公ダントンの台詞として引用されており、終始ダントンの言動を決定づける程の影響力を有しているところから見ても、革命に対する悲観的見方は歴史書の一時的影響とか、恋人との別れによる気分の落ち込みとかで片づけられるほど軽いものではない。人間というものは矛盾する様々な思いが縋り合ってきた複雑な存在である。革命についてのこのような否定的感慨にもかかわらずヒューマニスト、政治活動家としてのビューヒナーは眼前の社会的矛盾を座視するに堪えず、体制変革を訴えかけずにはおれなかった。蜂起への呼び掛けが失敗に終わった時、「宿命論書簡」の問題意識が強く蘇ってきた。そう考えて何の不都合があるだろう。

その書簡に記された懐疑的、厭世的な人間認識、歴史認識を実証するのに、恐怖政治末期ほどうってつけの題材を見つけ出すことは難しい。「歴史を支配するぞっとするような宿命論」、恐ろしいほど変わらない「人間の本性」、「鉄の法則」、「つまずき(Ärgernis)」といったものが具体的に何を指すのかについては最終章で取り上げることとし、先ずこのフランス革命破綻の状況がどのように捉えられ、描かれているか、そこから見て行きたい。

---

<sup>5</sup> Martin, Ariane: Georg Büchner. Stuttgart 2007, S. 69.

<sup>6</sup> 事実彼は気分的憂鬱以外に脳膜炎を患ってダルムシュタットの両親の許で療養している。

<sup>7</sup> Kurzke, Hermann: Georg Büchner, Geschichte eines Genies. München 2013, S. 106f.

<sup>8</sup> <http://buechnerportal.de/aufsaeetze/72-burghard-dedner-der-fatalismusbrief/>

## 1. 「人権」の消滅と「平等」の末路

ジャコバン党独裁(恐怖政治)が成立(1793年9月)するきっかけは諸外国(対仏大同盟)との戦争と国内各地に起きた反革命派の反乱である。これに立ち向かうためには権力を中央集権的に一極化し先鋭化する必要があった。だが前提条件が弱まれば独裁体制の必要性は低くなり、政権内部で左右各派の対立が顕在化してくる。恐怖政治の続行を主張するロベスピエールに対してダントンが「正当防衛(die Notwehr)が終わるところから殺人行為(der Mord)が始まる。これ以上人殺しを続ける必然的根拠は見当たらない。」(S.85)と言うのは、そのようなコンテクストにおいてである。

これに対してロベスピエールは「社会革命(die soziale Revolution)はまだ終わっていない。革命を中途半端にしておく者は自らの墓穴を掘ることになる。上流社会はまだ死に絶えていない。この甘やかされ尽くした階級に健全な民衆の力が取って代わらねばならぬのだ。」(S.85)と応じるが、このドラマで彼は貧困層救済のための具体的な社会革命的施策を何一つ打たないし、議論もしない。「社会革命」云々に続けて彼は「悪徳(das Laster)を処罰し、美德(die Tugend)が恐怖によって支配しなければならない。」(S.85)と言うのだが、そこには善悪二元論的に硬直したリゴリズムの危険な匂いが漂う。

これに対して寛容を求めるダントン派はSensualismus(官能主義)、Epikureismus(快楽主義)の立場を取るが、これは飢えに苦しむ民衆から著しく遊離していて、庶民の反発を買うのは必至であろう。だが一般市民からの乖離という点では、ロベスピエール派のIdealismus(理想主義)、Spiritualismus(過激精神主義)とて同じである。この対立軸はよく指摘<sup>9</sup>されるところだが、厳しい現実を置き去りにしてのそのような対立そのものが革命指導部の一般市民からの隔絶として批判的に捉えられ、描かれていると見るべきである。

その意味で「人権(Menschenrechte)」の一語がこの革命劇に一度も出て来ないというのは象徴的である。何と言っても民衆とリーダーの共闘を可能にするキーワードは「人権」だからである。フランス革命と言えど誰しも先ず「人権宣言(「人間と市民の権利の宣言」)」を思うであろう。革命の発端となったバスチーユ牢獄襲撃の翌月には早くも宣言が発せられた。自由、平等、人民主権、三権分立などフランス革命の基本理念が高らかに謳われ、憲法制定国民議会によって採択されている。とりわけ「人権」はフランス革命の最も重要な理念である。国民議会は「人の権利に対する無知、忘却、または軽視が、公の不幸と政府の腐敗の唯一の原因であることを考慮し、人の譲りわたすことのできない神聖な自然的権利<sup>10</sup>を厳粛に宣言した。ビューヒナーも祖国の都市に「人権協会」を組織し、『急使』でも人権を強調していた。その「人権」の語がこのドラマには欠けているのだ。

<sup>9</sup> Büchner-Handbuch Leben-Werke-Wirkung, Hrsg. von Roland Borgards u. Harald Neumeyer, Stuttgart-Weimar, 2009, S. 27f.

<sup>10</sup> 資料「フランス人権宣言」(1978年)全文 [https://ch-gender.jp/wp/?page\\_id=385](https://ch-gender.jp/wp/?page_id=385)

確かに、ギロチンの立つ革命広場に馬車がきりもなく囚人たちを運んできて、「革命の敵」たちの首が斬り落とされ、そのたびに、空腹を抱えて広場を埋め尽くす民衆が歓呼の叫びをあげる。お祭り騒ぎの「屠殺場(Schlachtbank)」(S.110)と化したパリ、この革命劇が描く通りに、人権ほどそぐわないものはない。

他にもたとえば「平等(Gleichheit)」，これはただ一度だけ出て来る。法の前ならぬ死の前の平等として。「万人の頭上に等しく死神の大鎌を振るう，これが平等ってやつさ。革命の溶岩が流れ出し，ギロチンが共和国を創るってわけだ。」(S.110)

革命指導者たちが宣言した美しいスローガンは，斬首される者たちの断末魔のうめき声と，断頭台を取り囲む民衆の狂乱の叫びとに変わった。「君たちの演説が現実の姿を取ったもの，それがこの阿鼻叫喚，首切り役人どもやギロチンだ。君たちは人の生首で体制を作ったのさ，異国の蛮王が髑髏でもってピラミッドを作ったみたいだね。」(S.110) あくまで自虐的，冷笑的だが，事実に符合している。これは単なる脇役(メルシエ)の与太話でない。「われわれが革命を作ったのではない，革命がわれわれを作ったのだ。」(S.91)「人形だよ，われわれは，未知の力によって操られているのだ，何物でもない，無に等しいのさ，われわれ自身は。」(S.100)というダントンの述懐とも呼応している。

革命の<sup>かくかく</sup>赫々たる理想がどうしてこのような結末に至ったのか。自由・平等・人権尊重の社会の実現を目指したはずの革命が何故このような惨状に至ったのか。ここに言う「未知の力」とはいったい何か。このドラマが突き止めようとしたのはそのことであろう。

破綻の原因として先ず析出されるのは，理想や理念の絶対化，次いで理性に対する情念の優位，理想の陰に潜むエゴイズムである。

## 2. 理想主義の陥穽 (ロベスピエールとポーザ侯爵)：「自由」の反転

「人権」は消滅し，「平等」は無残な結末を迎えた。では，「自由」は？

「革命政府は圧政に対する自由の専制政治です(Die Revolutionsregierung ist der Despotismus der Freiheit gegen die Tyrannei)。」という驚くべき撞着語法(オクシモロン)が飛び出すのは，第一幕第三場ジャコバン・クラブにおけるロベスピエールの演説においてである。恐怖政治の論理的正当化がその演説の骨子である。

共和制の武器は恐怖(Schrecken)であり，共和制の力は美德(Tugend)です。美德，これがなければ恐怖は腐敗し，恐怖，これがなければ美德は無効です。(中略) 恐怖は専制支配の武器です，だからわれわれのやり方は専制政治と同じだと彼らは言います。いかにも！つまり，自由の戦士(Freiheitshelden)の握りしめる剣も暴君(Despot)の親衛隊が持つ剣も同じということです。暴君は獐猛な家臣を恐怖によって支配するがよろしい，暴君としてそれは当然であります。君たちは恐怖によって自由の敵(die Feinde der Freiheit)を

殲滅するのです、共和制(Republik)を打ち立てんとする君たちにとってそうするのが当然です。革命政府は専政に対する自由の専制政治なのです。(S.78)

絶対王政が倒れた今、自由、共和制といった理想が絶対であり、「自由の戦士」は「自由」という名の新たな絶対専制君主に仕える軍隊であって、「自由の敵」を殲滅する使命を帯びているという論法である。これはロベスピエールが1794年2月26日と3月21日に実際に行った演説の記録を引用したもの。<sup>11</sup> それを書き写す時、ビューヒナーの顔が苦々しい嘲諷の笑いに歪んでいたであろうことは想像に難くない。

実は、理想主義・理念主義(Idealismus)に潜むこのような危険は既にシラーによって指摘されていた。『カルロス書簡(Briefe über Don Carlos)』第11.のポーザ侯爵に関する一節において。ポーザは常々自由や自主独立を口にしてはいるが、友人であるカルロス王子を一人前の人格として扱わず、横暴気ままに(despotische[n] Willkür)操る、これはポーザが標榜する理想と矛盾しているのではないか、という読者からの批判に答えたものである。

どんなに私利私欲のない純粋で高貴な人間であっても、美徳やこれから実現すべき幸福を熱烈に希求するのあまり、私利私欲でいっばいの暴君(Despot)と同じくらい横暴に他人を操ることになる。何故なら理想主義者も暴君も達成せんとする目標は彼ら自らの内であって外にはないからだ。つまり、理想主義者は心に描く理想像に向かって邁進するので、どうしても他人の自由と衝突する。その最終目標が自分の利害以外の何物でもない暴君と同じ結果に陥ることになる。(中略) だから私は、善意に満ち、どんな私利私欲をも超越した人物(ポーザ[引用者注])を選び、他人の権利をこよなく重んじ、万人が恩恵に浴することの出来る自由(Freiheit)の実現を彼の目標に掲げさせた。その彼が目標達成の途中で他者を省みない専制主義に迷い込んで行く(in Despotismus verirren)様を描いたとしても、普遍的経験則に矛盾しないと考える。同じ理想主義の道を歩むすべての者を待ち受ける罟(Schlinge)に彼(ポーザ)が陥るとするのは私の意図したことなのである。 [傍点引用者]<sup>12</sup>

実際、戯曲においてポーザ侯爵は自らの理想を実現するためとあらばカルロス王子を道具として扱い、王でさえ手玉に取り、王妃には、王子の恋を昇華させ理想の王国実現のための導きの女神となってほしいと願う。彼女は「私をあの方の天使とし、私の徳をあの方の力とせよとの仰せでございますが、私が女の弱き性から自由だと本気でお考えなのでしょう

---

<sup>11</sup> Funk, Gerard: Georg Büchner; Dantons Tod: Erläuterungen und Dokumente, Stuttgart 2002, S. 52.

<sup>12</sup> Schiller, Friedrich: *Briefe über Don Carlos*. In: *Sämtliche Werke Band II*. Carl Hanser Verlag, München 1985, S. 259.

か。女の情念というものをそんな言い方で美化することが私たち女の心にとってどれほど危険なことか、よくはお考えにならなかったようでございます<sup>13</sup>と異議を申し立てている。更にポーザは、エーポリ公女が重大な秘密を知ってしまったために計画遂行の妨げになると思ひ込み、彼女を殺害しようとさえする。『カルロス書簡』でポーザ侯爵は *Herrschafts*, *Eigendünkel*, *Despotismus*<sup>14</sup> といった言葉で批判され、理想主義に潜む危うさが指摘されていた。ビューヒナー劇のロベスピエールは明らかにその延長線上にいる。

革命末期の恐怖政治が扱われる『ダントンの死』では、若き日のロベスピエールは描かれていない。しかし、彼がかつては人権を重んじる開明派の有能な弁護士であり、ルソーの思想に心酔する理想主義者であったことはよく知られている。死刑廃止を最初に唱えたのもロベスピエール、しかし革命が混迷を深める中、彼はポーザ侯爵が掛ったのと同じ罠に陥り、理想を絶対化するのあまり、これに刃向う(と見なされる)他者の人権も自由も生命さえも踏みこみにじて顧みない独裁者、暴君<sup>15</sup>へと化して行くのである。

問題は、これがロベスピエール一個人に限らないことだ。フランス革命それ自体が、あの美しいスローガンや人権宣言に見られるとおり、輝かしい理想主義と啓蒙思想を支柱の一つとし、その実現を目指すものであった。革命そのものが当初から理想主義・理念主義の罠に陥る危険をはらんでいたということである。

ちなみにビューヒナーが「理想主義者」シラーを批判したことはよく知られている。

たびたび引き合いに出されるのは、『ダントンの死』と同じ 1835 年に書かれた家族宛の手紙で、理想主義詩人が描くのは、「大袈裟なパトスを持った操り人形ばかり、血肉を備えた人間ではありません...要するにゲーテやシェイクスピアは評価しますが、シラーはまったく評価しません。」(S. 306)というもの。もう一つは、小説『レンツ』の中の「創られたものが命を持っていると感じられるかどうかこそが美醜よりも重要で、これが芸術作品の唯一の基準だ。」という主人公の意見である。レンツはシェイクスピア、民謡、それにゲーテを挙げていて、「他はみな火に投げ入れもかまわない。(中略)この理想主義というやつは人間のありのままに対する破廉恥きわまる侮辱なんだ。」(S.144)とまで言う。

ビューヒナーの批判とは裏腹にシラーはむしろ理想主義に潜む危険を自らの戯曲に書き込み、『書簡』で指摘していた。ビューヒナーのシラー批判を鵜呑みにするわけに行かないことは明らかであろう。要するにシラーが警告した通りのことがロベスピエール、フランス革命において起き、<sup>16</sup> ビューヒナーはそれを見逃すことなくこの戯曲に映し出して見せた、ということである。

---

<sup>13</sup> Schiller, Friedrich: *Don Carlos*. In: *Sämtliche Werke Band II*. Carl Hanser Verlag, München 1985, S. 175.

<sup>14</sup> Schiller, *ibid.* S. 261.

<sup>15</sup> ロベスピエールを指して *ein Nero*(S.128), *Diktatur*(S.120)といった言葉が使われている。

<sup>16</sup> 『ドン・カルロス』は 1787 年、『カルロス書簡』は 1788 年、フランス革命以前である。



ポーザ侯爵が後のロベスピエールやフランス革命を先取りする人物であったとするなら、革命的理想主義者としてではなく、むしろ熱狂的理想主義に潜む危うさを体現する人物としてであろう。『ドン・カルロス』もそのような視点から読み直す必要がある。

### 3. 理想の陰に潜むエゴイズム、理性を圧倒する情念

だが理想主義の問題点はその絶対化だけではない。美しい理想を語る背後に潜む情念やエゴイズムの問題がある。実はポーザ侯爵についても既にそのことが指摘されていた。

絶体絶命の危機に陥ったカルロス王子の身代わりとなって死ぬ覚悟を固めたポーザ侯爵がその決意を王妃に打ち明けた時、エリーザベトは次のように言う。「貴方のご自身で崇高とお呼びになるその行為(王子の身代わりとなって死ぬ[引用者注])に飛び込んで行かれたのです。(中略) 私には貴方というお方が分かっています、貴方はずっと以前からそれを渴望なさっていた、たとえ幾千の心が千々に砕け散ろうとも、ご自身の誇りさえ満たされればそれでよいのです。(中略) 貴方はただ人から褒め称えられることだけを願っていらしたのです(Sic haben/ Nur um Bewunderung gebuhlt.)」<sup>17</sup> ポーザはたじたじとなって「まさか! そんなお言葉を聞かされようとは---」(S.176)と絶句するが「お妃さま! ああ、何たること! しかし人生はやはり美しい!(O Gott! das Leben ist doch schön!)」<sup>18</sup>と言って立ち去る(S.176f.)。この受け答えは不得要領の感を否めないが、動揺を隠すために精一杯その場を取りつくろったのであろう。作者もこの問題にそれ以上深入りしたくなかったと想像される。

ビューヒナー描くところのロベスピエールに対しても同様の指摘がなされる。この芝居で両雄が対決する唯一の場面で、ダントンは「みんなエピキュリアンなのさ。(中略) めいめい自分の本性(Natur)に従って行動する、みんな結局自分にとって快いことをしているんだよ。」(S.86)と言い、ロベスピエールが「清廉の士(Unbestechlicher)」(S.86)であり続けるのは自分の方が他の奴らより立派だというケチな優越感に浸って悦に入るためだ、そういう哀れな楽しみのためにすぎない、と喝破して見せる。この「美德」批判はいささか乱暴で粗雑の感を禁じ得ないが、ロベスピエールの自信はこれによって揺らぐ。(S.87ff) ダントン派を排除するのは、本当に共和国、社会革命、自由といった理想貫徹のためなのか、それとも、自分の心中深くに潜む快を求める情念(エゴイズム)からなのか、疑いが兆す。

王妃によって、自らの心底に潜む悲劇的英雄願望を指摘されたポーザ侯爵が一瞬たじろいだけなのに対して、ロベスピエールはダントンの言葉に反発しつつも、対決を終えて一人になった時、「あいつ(ダントン)の巨大な影におれがかき消されるのではないかという怯えから奴を無き者にしたのだと世間は言うだろう。---もしその通りだとしたら。---ほんと

---

<sup>17</sup> Schiller, *ibid.* S. 176.

<sup>18</sup> Schiller, *ibid.* S. 177.

にこれは必要なことか。そうだ、大事なのは共和制だ! あの男には消えてもらわねばならない。おかしいな、おれの中で違う考え方がたがいに睨み合っているなんて。(中略)--- 奴の言った言葉がどうしていつまでも頭を離れないのだ。(中略) おれの中で嘘を吐いているのはどっちなのか、分からない。」(S.87)

自分が口にする理想や主義主張の背後に自分では気が付かない罪深い情念が潜んでいて、それが自分を突き動かしているのではないか、という疑い。更に、目覚めている時の人間の行動は夢の中と同じく、理性ではない何か別のものによって支配され、現実社会の出来事は人間の意志や計画ではなく偶然(Zufall)によって決まるのではないか、そういう疑念を口にするのである。(S.88) そこに無意識とか意識下という言葉は出て来ないが、フロイトの理論を彷彿させるものだ。「昼の光を怖れて隠れていた思いがけない思想(Gedanken)や願望(Wünsche)など、雑然として形の無かったものがひそかな夢の館に忍び入る。それらは半ば肉となり、眠りの中で手足を伸ばし、唇から眩きを洩らす。(中略) われわれが覚めている昼間の行為だって夢の中のそれと同じ。夢の中より緩慢だが、よりはっきりして、最後まで実行される、そこが夢と違うだけだ。思想の中には罪も潜んでいて、それが実現されるかどうかは成り行きしだい(Zufall)だ。」(S.87f.)

この時のロベスピエールは、「われわれの内にあつて騙し、姦淫し、盗み、殺すのは何なのだ。われわれは得体のしれぬ力によって動かされる操り人形だ、われわれ自身は何物でもない、無に等しい」[傍点引用者](S.100)と言うダントンと同じ地点に立っている。

ダントンとの違いは、そういう疑念に取りつかれて革命運動に意欲をなくし、行動を諦めてしまうダントンに対して、ロベスピエールがこれをひと時の迷いとして振り払ってしまう点にある。人間のいかがわしさに気付き始めはするが、理性や意志の力への疑念に引きずり込まれてしまう前に、闇の中からサン・ジュストが立ち現れる。「おい誰だ、暗闇の中にいるのは? おい、灯りだ、灯りを持って(He, wer da im Finstern? He, Licht, Licht!)」(S.88) この闇はロベスピエールの心の闇、サン・ジュストは彼の分身であろう。灯りの中にサン・ジュストの姿がくっきり浮かびあがると、ロベスピエールの迷いは徐々に薄れて行く。

サン・ジュストの差し出したダントン派の新聞に「この血に飢えた救世主、(中略) 自らは犠牲になることなく他人のみを生贄に捧げる。(中略) 救世主のシミ一つない燕尾服はフランスの死装束であり、演壇でピクピク動く彼の細い指はギロチンの刃だ」という旧友カミーユによるロベスピエール批判の記事を目にするや、「そうかお前もか、カミーユ? --- 奴らをみんな片付けるんだ! さっさとやれ! 二度と戻って来られなくするには死んでもらうしかない」(S.89)「なら急げ、明日だ! 悪足掻きしないようさっさと死なせてやれ。おれはこのところ苛立っているのだ(empfindlich seit einigen Tagen)。」(S.89)

ほとんどマフィアの親分の台詞ではないか。幼馴染の同志カミーユにまで手厳しい批判を浴びせられたショックと、思い通りに事が運ばないことへの苛立ちしかそこにはない。彼が繰り返し口にする自由・共和制・社会革命といった大義名分よりも、最後には憤り、恨み、

復讐といった、あまりに人間的な情念に突き動かされて決断が下され、暴君へと変貌してゆく様子が描き出されている。

ポーザ侯爵との比較に戻れば、ポーザにおいても既にその端緒は示されていたものの、ロベスピエールの方が自らの行動への自信の揺らぎも迷いもはるかに深い。確かにシラーはビューヒナーが批判するような作り物しか書けない理想主義的へぼ詩人ではなかった。彼は十分にリアリスト<sup>19</sup>であったが、理性や理想や意志の力を深く疑う、人間の自律性を強く疑う、というところまでは行ききらなかった。それが二人の、そして時代の分かれ目であり、シラーに対するビューヒナーの苛立ちの原因だったのではあるまいか。

#### 4. 「友愛(Brüderlichkeit)」の行方：民衆，リーダー，スケープゴート

フランス革命のスローガンと言えば「自由・平等・友愛」。「自由」は専制に反転し、「平等」は死の前の平等へと転落した。では「友愛」はどうなったか。

理想主義と並んで革命のもう一つの原動力は、飢えに苦しむ民衆のアモルフなエネルギーである。劇の主人公はダントン、ロベスピエール、民衆の三者だが、革命運動のダイナモは民衆である。民衆はパンを寄せと叫び、革命指導者たちは理想・理念をのみ熱く語る。それら理想の中で人民にとって重要なのは人権と平等、パンを求める民衆と理想を語るリーダーの接点是人権と平等を描いてはいる。だが既に繰り返し述べたとおり、人権は誰の口からも発せられず、実態としても消え失せている。平等はもはや死の前の平等でしかない。代わりに民衆とリーダーとを繋ぐ何かが必要ならなければならない。それは何か。スケープゴート・メカニズム<sup>20</sup>である。

停滞する危機的状況の中で、社会に鬱積する負のエネルギーを発散させる手っ取り早い方法は、格好のターゲットを見つけ、そいつに全責任を負わせて血祭りにあげ、みんなで胸の痞えを下ろすことである。空腹を抱えて荒れ狂う民衆の怒りを、誰かに、あるグループに向けて爆発させる、このおぞましいスケープゴート・メカニズムの中で一部のリーダーが延命を遂げ、民衆は虚妄の満腹感<sup>21</sup>と一体感に浸る。

ビューヒナー劇は、民衆とリーダーの真の連帯を可能にするはずの人権と平等が見失われた状況を描き、この本来あるべき絆の欠如を、人権とは真逆のおぞましいからくりによって埋めようとする様を描き出して見せた。革命を破綻に導いた第三の要因としてこのドラ

---

<sup>19</sup> シラーは、自らの情勢判断を信じ切れず占星術に頼って身を亡ぼす Wallenstein を描いている。

<sup>20</sup> スケープゴート・メカニズムは Sündenbockmechanismus を英語に直訳し、カタカナにした「和製英語」である。

<sup>21</sup> ドラマの最後の部分で、ギロチンの立つ革命広場に子どもを抱えた女がやって来て喚く。「どいて、どいて、子供らが泣き叫ぶんだ、ひもじいからだよ、この子らが泣き止むにはあれを見せるしかないんだ、どいて、場所を空けて！」[傍点引用者](S.130)

マが剔抉して見せたものはスケープゴート・メカニズムであり、それこそが「宿命論」、恐ろしいほど変わらない「人間の本性」、「鉄の法則」の正体である。

その禍々しいメカニズムがどのようにして発動されるか、その手法を以下に述べたい。

民衆とリーダーの連帯を可能にする人権と平等が口にされないにもかかわらず、両者があたかも一体であるかのように盛り上がる場面が描かれている。その一つは第一幕第二場、ロベスピエールが激昂する民衆を前に行う演説である。そこでどのようにして連帯が図られるか、テキストに沿って見てみよう。

**ロベスピエール** 貧しく徳高き諸君! 君たちは立派に義務を果たしている。君たちは君たちの敵を生贄に捧げている。諸君、君たちは偉大だ! 君たちは雷のごとく荒れ狂っている。しかし、諸君、我が身を攻撃し、傷つけてはならない。猛り狂って自分を殺めてはならない。君たちが滅びるのはただ自らの力によってだけだ、そのことを君たちの敵は知っている。君たちの立法者たるわれわれが警戒の目を光らせ、君たちの手をとって導く。そうすれば君たちの眼に狂いはなく、敵は君たちの手から逃れることは出来ない。一緒にジャコバン党へ来るがいい! 君たちの兄弟が手を広げて君たちを迎える。われわれはわれわれの敵に血の制裁を加えるのだ。

**民衆** **口々に** ジャコバン党へ行こう! ロベスピエール万歳! [傍点引用者]

**ROBESPIERRE.** *Armes, tugendhaftes Volk! Du tust deine Pflicht, du opferst deine Feinde. Volk, du bist groß! Du offenbarst dich unter Blitzstrahlen und Donnerschlägen. Aber, Volk, deine Streiche dürfen deinen eignen Leib nicht verwunden; du mordest dich selbst in deinem Grimm. Du kannst nur durch deine eigne Kraft fallen, das wissen deine Feinde. Deine Gesetzgeber wachen, sie werden deine Hände führen; ihre Augen sind untrügbar, deine Hände sind unentrinnbar. Kommt mit zu den Jakobinern! Eure Brüder werden euch ihre Arme öffnen, wir werden ein Blutgericht über unsere Feinde halten.*

**VIELE STIMMEN.** *Zu den Jakobinern! Es lebe Robespierre!* [強調引用者] (S.75)

日本語では「諸君」、「君たち」と訳すしかないが、Volk(民衆)は単数なのでドイツ語ではduである。初めの呼びかけはduで始まり、ようやくKommt mit---! (ihrに対する命令)のところで複数形ihrに切り変わり、自分たちジャコバン党をEure Brüder(君たちの兄弟)と表現して民衆を取り込み、最後はihr(君たち)がwir(われわれ)に同一化される。duからihr、ihrからwirへの人称代名詞の切り替えによって徐々に一体化が図られる。更に短い演説の中に敵(複数Feinde)が三度も出て来て、初めdeine Feinde(君[たち]の敵)と呼ばれていたものが最後にはunsere Feinde(われわれの敵)と、共通の敵に仕立て上げられ、兄弟(Brüder)であるわれわれが共にわれわれの敵を「血の裁き」にかけようと呼びかけて締めくくる。敵を強調し、共通の敵に対して団結する「われわれ兄弟」を演出する。

ちなみに「友愛(Brüderlichkeit)」はこの戯曲には一度も出て来ない。だが、何度か使われるBrüderは、ここでのように、敵(Feinde)に対抗して連帯する「われわれ兄弟」という形で、排除すべき敵を前提としている。<sup>22</sup>

この後、ジャコバン・クラブでの長大なロベスピエール演説は、「共和制の敵」を二派に分ける。一つはエベール派、彼らはキリスト教信仰と、侵すべからざるものとされている所有権・財産権を否定して社会を無秩序に陥れようとした、だから処刑したのである。残るは「寛容(Erbarmen)」を求め一派である。ダントンの名前こそ口に出さないが、「以前は屋根裏部屋の貧乏暮らしだったくせに今では馬車を乗り回し、かつての侯爵夫人や男爵夫人とふしだらな関係を結んでいる。(中略)彼らはいわば革命によって成り上がった侯爵や男爵で、金満マダムと結婚し、豪華な食事会を催し、カード遊びに興じ、召使を雇い、華麗な衣装を身に纏っている。(中略)民衆を食べ物にすることしか考えず、罰せられることなく民衆から衣食を取り上げ、共和制や革命を金儲けの手段にしている。」彼らは反革命分子が次々に粛清されるのを見て怖気づき「寛容」を叫んでいるのだ。「だが同志諸君、安心してもらいたい、(中略)彼らを裁いて共和国に偉大な正義の実例を残してみせる。」(S.79)

「寛容派=ダントン派」の「悪徳(Laster)」の中身は、贅沢(Luxus)、ふしだら(Unzucht)、収賄、本来民衆のものであるべき衣食の篡奪(Ausplünderung des Volkes)である。ロベスピエールの弾劾演説に中傷が混じっていたとしても、これが説得力を持つのは、民意の後押しを受けているからだ。「民意」は直前の場面で示されていた。

一つは、ジャコバン・クラブで最初になされた地方都市リヨンからの使節の訴え。彼はエベール派粛清への不満を語り(ロベスピエールがエベール派粛清の理由を説明するのはこれを受けてのことである)、反動勢力が再び勢いを増しつつある現状への不安を述べて、反革命派に対する峻厳な措置を要求したのである。「諸君が弱腰になれば革命は終焉を迎える。貴族が息を吹き返せば自由が息絶える。共和国のために死ぬのは臆病者だけだ、ジャコバン党员は共和国のために殺すのだ」(S.76)という過激な主張で、恐怖政治の貫徹を求める訴えである。

もう一つはロベスピエールが民衆の前に姿を現した際の路上における下層民衆たちの叫びである。「どうしたのだ、市民諸君!」という革命指導者の問い掛けに民衆は怒りを爆発させ、「どうしたもこうしたもあるか?8月と9月にちょっと血が流れたぐらいで民衆の頬は赤くならなかった。ギロチンじゃまどろっこしい。ドバーッと一気に血の雨だ」「おれたちの女房や子供たちはパンが欲しいって喚いている。貴族どもの肉を食わせるのだ。やい、ぶっ殺せ、一張羅を着込んでいる奴をぶっ殺すんだ(Totgeschlagen!)」「ぶっ殺せ!ぶっ殺せ!」(S.75)。

---

<sup>22</sup> „die inneren Feinde der Republik“(S.77), „die Feinde der Freiheit“(S.78), „der politische Feind der Freiheit“(S.78), etc.

更に民衆はその前にこうも叫んでいた。リーダーたちに言われるがまま自分たちは王侯貴族や反革命の輩を血祭りにあげた、だがいっこうに暮らしは楽にならない、これは、当の革命指導者どもの中に途中で富を横取りしている奴がいるからだ、そいつらを倒せ。「うまい汁を吸ったのは奴らで、おれたちは相変わらず裸足で凍えている。奴らの太ももから皮を剥いでズボンを作ろう、奴らの贅肉を煮込んで旨いスープを作ろうぜ。進め、服に穴の開いてない奴はぶっ殺すんだ!」 [傍点引用者] (S.74)。

演説の冒頭でロベスピエールは「われわれは各方面からの憤懣の叫びをひたすら待っていたのだ」 (S.77)と言っている。街頭で民衆に呼びかけた際、「君たちの立法者たるわれわれが(中略)君たちの手をとって導く」(S.75)と、自らの指導力を強調していたが、今は民主的共和制の時代である。王権は廃止され、主権は人民に移った。民意こそが法<sup>23</sup>であり、民意に沿わない言動をとる指導者は断頭台に送られかねない状況にある。地方都市や下層民衆たちの不満に耳を傾けるが、衣食の不足という彼らの怒りの原因を取り除く施策を提案、実施する代わりに、彼らの怒りの向かうべき敵を指し示して見せる、それがこのロベスピエール演説である。民衆とリーダーのこのような共闘がいかに歪んだ、禍に満ちたものかは明らかであろう。自由と民主主義に潜む危険を予告しているようでもある。

ダントンと共に処刑されることになるラクロワ<sup>24</sup>はロベスピエール演説をこう分析する。「簡単な話さ。無神論者の過激派(エベール派[引用者注])は処刑台に送った。しかし民衆には何のご利益もなかった。彼らは依然として裸足で街を駆けずり回り、貴族の肌を鞣して靴を作れと叫んでいる。ギロチン熱を下げるわけにはいかない、もう二三度下がったら公安委員会自身が処刑台に横たわらななきゃならなくなる。(中略)民衆はミノタウロスみたいなものだ、毎週人身御供を欲しがらる、死体なんぞ腹の足しにもならないのに。」[傍点引用者] (S.80) 更には「左翼エベール派はまだ死に絶えていない。民衆は食うものもなければ着る物もろくにない。これが恐るべき梃子になる。公安委員会は自分たちが縛り首にされたくなければ、他の連中を血祭りに上げるしかない。向こうの皿に重しが必要なのだ、大物(ダントン[引用者注])の首がね。」 [傍点引用者] (S.84)

追いつめられた公安委員会は自らの身を守るためには身代わりとして然るべき獲物(スケープゴート)を差し出すしかない。これにダントン派はうってつけなのだ。ラクロワの解説はこうだ。「それにね、おれたちはロベスピエールの言うように悪徳漢かもしれないぜ、つまり楽しんでいからさ。民衆が道徳的なのは楽しみを知らないからだ、働き過ぎて舌も粘膜もガサガサ(die Genußorgane stumpf)になっている、酒を飲むにも金がない、売春宿にも行かない、口から安物のチーズやニシンの臭いがして女の子が相手にしてくれないからさ。(中略)われわれは悪徳漢と呼ばれている。(中略)ここだけの話だが、まんざらでたらめって

<sup>23</sup> ERSTER BÜRGER. Was ist das Gesetz? / ROBESPIERRE. Der Wille des Volks. (S.75)

<sup>24</sup> ラクロワはいわば視点人物である。彼の発言は冷静に情勢を見ていて、傾聴に値する。

わけじゃない。ロベスピエールと民衆は(楽しまないから[引用者注])道徳的ということになるのさ。サン・ジュストが筋書きを書き、バレールが革命服を仕立てて、国民公会に死刑判決を出させる、そして--- みんなお見通しさ。」(S.84f.)

美德を称揚するのは、民衆が貧困ゆえに押し付けられている惨めな生活を「徳高き(質素・禁欲的)」と持ち上げて宥めるのみならず、構造的貧困を常態化する効果がある。民衆はうまく誤魔化されていることに気付いている様子はない。ダントンは「民衆が享樂者を憎むのは去勢された男(Eunuch)が一人前の男を憎むのと同じだ。」<sup>25</sup>(S.85)と言っているが、当然ながら「去勢男」の民衆は「インポのマホメット(ein impotenter Mahomet)」(S.117)と陰口されるロベスピエールに共感を寄せる。逆にダントンを寛容派が享樂主義的な思想と暮らしぶりによって貧しい民衆の恨みを買ひ、革命停滞の責任を押し付けられて格好の標的にされるのも自明の理であろう。寛容派を弾劾するロベスピエール演説に多少のフェイクが混じっていたとしても、「革命の聖者マラーやシャリエじゃなく神の如きエピクロスや美しいお尻のビーナスを守護神として共和国の門を飾ろうではないか」(S.71)などという「寛容派」の主張は、飢えと寒さに憤って「ぶっ殺せ!」を連呼する民衆から遊離して、その怒りの矛先を向けられるのも理の当然である。

次のような民衆の叫びには単純な頭にインプットされた嘘がかなり混じっているが、現実を動かすのは真実にしく見えることであり、人を動かすのは理性ではなく嫉妬・羨望・怨み・憤懣といった原始的情念である。

ダントンはいいものを着ている、ダントンはいい家に住んでいる。ダントンの妻は美人だ。奴はブルゴーニュ・ワインの風呂に入り、銀の皿でピフテキを食い、酔っぱらっておめえらの女房や娘たちと寝るんだ。---ダントンはおめえらと同じように貧乏だった。どうしてこんな贅沢が出来るようになったか。王に買ってもらったからだ、王冠を守るのと引き換えに。オルレアン公が奴に渡したんだ、王冠を盗って来てもらうために。外人が奴にくれてやったのだ、おめえら皆を裏切るように。--- ロベスピエールは一文無しだ。徳高きロベスピエール! みんな知っているぞ。

全員: ロベスピエール万歳! ダントンのくたばれ! 裏切り者をやっつけろ! (S.121)

公安委員会は陪審員の選出に、規則通りの抽選ではなく、恣意的に聴覚障害者や飲んだくれを選び、被告の中にダントン派と一緒に文書偽造者、銀行家、外人実業家を混ぜておく(S.109)。更にダントンやカミーユの女房達が紙幣をばら撒いて民衆を買収しようとしたとか、監獄内で陰謀が企まれているとかいうタレこみをサン・ジュストは嘘(Märchen)と承知で利用する(S.116)。これは「政治的に仕組まれた司法殺人(ein politisch manipulierter

---

<sup>25</sup> このようなダントンの発言に民衆への同情は感じられない。

Justizmord)』だという指摘がある。<sup>26</sup> 独裁体制でよく用いられる手法だ。まさしく「専制政治」(S.78)に見合った手口である。

スケープゴートは身代わり、つまり真の原因ではないから、スケープゴートの粛清をいくら繰り返しても窮状は改善されない。第三幕の終わり近く革命裁判所でダントンは「君たち民衆はパンが欲しいのに、彼らは切り落した頭を投げてよこす、渇きに苦しむ君たちに彼らはギロチンの階段に流れる血を舐めさせている。」(S.121)と叫んで聴衆の間に動揺を引き起こす。

しかしこの程度の真実はドラマの初めの段階で既に口にされていた。そこでは「ぶっ殺せ!(Totgeschlagen!)」を連呼する民衆の前に身なりのいい青年が通りかかる。「こいつハンカチを持ってやがる、貴族だ、街灯に吊るせ!」「おれたちの一生は労働による殺人だ、六十年間ロープに吊るされてバタバタもがいている」、それに比べりゃお前なんざあほんの一瞬であの世行き、おれたちの方がずっとお情け深いぜ。青年は「かまいませんがね、ぼくを街灯に吊るしたって世の中明るくなりませんよ」(S.74)と言って、民衆から喝采を浴び、解放してもらえる。青年が言ったことは真実だと、荒れ狂う民衆も一瞬気付いてブラボーを叫ぶ。贖罪の山羊をいくらギロチンにかけようとも、いくら怒りに駆られて王侯貴族を街灯に吊るそうとも問題の解決には繋がらない、という真実に、ほんの一瞬ではあったが、既に早い時期に到達しているのである。

「民衆の力とは理性の力だ。(Die Macht des Volkes und die Macht der Vernunft sind eins.)」とエローはかつて口にすることがあって、後にそれが揶揄されることになる(S.108)ののだが、無知蒙昧と見える民衆には直感的に真実を識別する能力が備わっていることを、このエピソードは示している。だがその明察に持続性はなく、活かされることがない。本来は人権や平等を叫ぶべき民衆は、恨みや復讐といった原始的情念によって支配されている。

あの娘たちが売春し物乞いするのは腹を空かせているからだ。おれたちのかみさんや娘らの肉を買うやつをナイフで刺し殺せ。おれたちの娘を金で買う奴らをやっつけろ。おめえらの空きっ腹はグウグウ、奴らはたらふく食って胃がもたれる。おめえらの服は穴だらけ、奴らはぬくぬく着込んでやがる。おめえたちは手にマメをこさえ、奴らの手は絹のようにスベスベだ。つまりだ、おめえたちは働き、奴らは遊んで暮らす。つまりはだ、おめえたちが稼いだものを奴らが盗んでるってことだ。だから、盗まれた財産からほんのちょっと取り戻そうとすりゃ、おめえたちは売春し、物乞いしなきゃならん。だから奴らは悪党なのだ、ぶっ殺さなきゃならんのだ! (S.73f.)

---

<sup>26</sup> <http://buechnerportal.de/aufsaeetze/dantons-tod#zum-stoff-des-dramas>



おれたちにだって人権はあるぞ、社会構造を変えよ、平等を実現しろ、というのを彼らはこんな言い方でしか言えない。リーダーたちはこの叫びから民衆の真意を汲み取って、人権を重んじる平等な社会の実現を目指し着実な施策を計画実行する責務を負っているはずだが、少なくともこのドラマにおいては、「ぶっ殺せ!」の圧倒的な脅威に怯えて、怒りの矛先を政敵に向かわせるための計略を巡らせることしかやらない。社会を覆う鬱憤を晴らし、自らの延命を図るべくスケープゴートを仕立てて粛清し、民衆はそれによって一時的な一体感と高揚感に浸る。このドラマが描き出して見せたのは民衆と一部リーダーとのこの禍々しい連帯である。

シラーは*An die Freude* で „Alle Menschen werden Brüder, Wo dein sanfter Flügel weilt.“と謳ったが、ビューヒナー劇において人々が「兄弟」となるのは皆で「共和制の敵」や「自由の敵」をギロチンにかける狂喜乱舞の場においてである。ちなみにSchlachbank(屠殺場)(S.110)は生贄<sup>ほふ</sup>を屠る祭壇の意味もある。ビューヒナーの「革命劇」は恐怖政治末期の惨状を、スケープゴート・メカニズムの跳梁跋扈として暴いて見せた。

## おわりに — 「十字架の男」, 贖罪の山羊イエス

宿命論書簡の最後の部分がほぼそのままドラマのテキストに出て来る。夢の中で9月虐殺のトラウマに魘されるダントンの口から。それゆえ、あの「つまずき(Ärgernis)」が1792年のいわゆる「9月虐殺」に関わっていると見る見方が一般的である。

9月虐殺とは、8月末パリ東方のヴェルダン要塞がプロイセン軍に包囲され、陥落すれば首都が危うい。当時の法務大臣ダントンは民衆を前に勇気を鼓舞する演説を行い、義勇軍を送りだした。パニックに陥ったパリの民衆の間に、獄に収監されている政治犯たちがひそかに敵側と通じていて、もし要塞が陥ち、首都攻略がなされれば革命勢力は殲滅されるという噂が広がった。不安に怯える市民たちは次々に監獄を襲って、反革命の動きを未然に止めるために未決囚を引きずり出し、即決裁判にかけ私刑に処した。9月2日から6日までの5日間に出た犠牲者は1200人とも1400人とも言われる。ダントンはその殺戮を止められなかった。

ジュリー: 敵国の王たちがパリから40時間のところまで迫っていたわ。

ダントン: 幾つもの要塞が落ち、市中の貴族どもが…

ジュリー: 共和国は崖っぷちだった。

ダントン: そう崖っぷちだった。身中の敵をそのままにしておくわけに行かなかった、そんな愚かな真似は出来なかった。敵同士が同じリングにいる、生き残るのはどちらかしかない、強い方が弱い方を突き落とす…間違っていないだろう。

ジュリー: 間違っていないわ。

ダントン: われわれが奴らをやっつけた…人殺しじゃない、内戦だった。

ジュリー: あなたは祖国を救ったのよ。

ダントン: そうさ。あれは正当防衛(Notwehr)だった。避けられなかったのだ。十字架の男は気楽なものだ、「つまずき(Ärgernis)は避けられない、つまずきをもたらす者は不幸である」だって。避けられない(Muß), こいつだよ, 問題は。避けられないという呪いの懸った手を呪うのは誰だ。避けられないなんて言ったのは誰なんだ。われわれの中にあつて嘘をつき, 姦淫し, 盗み, 殺すのは何なのだ。

操り人形だよわれわれは, 得体のしれない力によって操られているのだ, 無だよ, 何ものでもないんだ, われわれは。目に見えぬ魔性の者たちが振り回す剣なのだわれわれは, 目に見えるのは剣だけ, 操っている手は見えない, おとぎ話にあるやつだよ。(S.99f.)  
[傍点引用者]

9月虐殺は「正当防衛」だった, 革命の成果たる我が共和国を反革命勢力から守るためにやむを得なかったのだ, そういう政治的事情も知らずに「つまずき(Ärgernis)をもたらす者は不幸である」と言った「十字架の男」イエスは気楽なものだ, とダントンは言っている。

しかし実際に民衆によって牢から引きずり出され集団リンチされた者たちのほとんどは政治犯ではなかった。反革命の攻撃から身を護る「正当防衛」というダントンの説明は成り立たない。そのことをこの時点でダントンが知らなかったはずはない。彼が民衆を煽ったわけではないにしても(schuldlos), 法の番人として民衆の無法な動きを阻止できなかったことは事実であり, だからこそ彼は罪責感に苦しみ, 夢魔に魘されたのである。この場面での彼の発言の半分は言い逃れと自己弁護であり, 半分は悔恨と慙愧の念, 罪深く無意味な殺戮(Schuld)を止めさせられなかった無力感の告白である。妻ジュリーとの対話場面のダントンは自己正当化と自責とに分裂しており, 矛盾に満ちている。そのことをわれわれはテキストから素直に読み取るべきであろう。

この事件は, 不安と恐怖に駆られたパリ市民の間に流言飛語が飛び交い, 偽の情報に興奮してますます不安を募らせた民衆が無防備な囚人たちに襲いかかり, リンチして生贄に供することで高ぶる気持ちを鎮め安心を得ようとしたスケープゴート・メカニズムの典型的な例である。<sup>27</sup> Rüdiger Campeの言う「咎なき罪(schuldlose Schuld)」の罪, ダントンの口にする『聖書』の避けられぬ「つまずき(Ärgernis)」とは, ここでは, 「人間の本性」に深く刻み込まれた罪, スケープゴート・メカニズムを発動する根源的罪業を指しており, イエスは自ら意識して無防備な「弱者」となり, 贖罪の山羊(Sündenbock)として圧倒的多数の「強者」によって<sup>はりつけ</sup>磔されることで人類の究極の罪を贖おうとしたのだった。ダントンがここでわ

---

<sup>27</sup> 関東大震災(大正12年, 1923年)の際に起きた朝鮮人虐殺事件にも同じメカニズムが働いている。学校や企業で後を絶たないイジメもまた同様である。

ざわざ「十字架の男」に言及したのは、うすうすではあるがその関連に気付いていた証拠であろう。

興味深いのはロベスピエールもまたイエスに言及していることだ。

さよう、おれは血塗られたメシアだ、生贄を捧げはするが生贄にはされない。あのお方は自分の血で人々の罪を贖った。おれは人々の血で人々の罪を贖わせる。あのお方は人々に罪を犯させた、おれは自分で罪を引き受ける。あのお方は苦痛の喜びを味わった。おれは首切り役人の苦悩を味わうのだ。どちらがより克己的か、おれか、それともあのお方か。---しかしこの考えにはどこか可笑しなところがある。おれたちはどうしていつもあのお方の方ばかり見るのだ。確かに人の子イエスはおれたちすべての中で十字架に架かっているのだ。おれたちはみなゲッセマネの園で血の汗を流して闘っているのだ。しかし誰も自分の傷で他人を救う者などいない。[傍点引用者] (S.90)

ここで繰り返されるキーワードも *opfern* とイエスと十字架だ。ロベスピエールも煩悶する。しかし彼は居直り、結局生贄にする(*opfern*)側に就く。ダントンは最終的には生贄にされる(*geopfert wird*)ことを受け容れる、従容として死に就くわけではない。

既に述べたように、1833年学生だったビューヒナーはドイツの政治状況を、民衆と王侯貴族とリベラル派とによって演じられる「猿芝居(*Affenkomödie*)」(S.285)と断じ、非道な権力者たちを麻縄で街灯に吊るすことを夢見ていると手紙に書いた。

しかしこのドラマは、現実となった革命がはるかに凄惨な「猿芝居」へと転落して行く様を描き出している。飢えに駆られる民衆と理想を叫ぶリーダーとを結び付ける唯一の旗幟「人権・平等」は視界から消え失せ、両者を繋ぐ「友愛」の絆はもはや共通の敵のみ。その敵を生贄に捧げることでリーダーは一時的な延命を遂げ、民衆は鬱積した憤懣を晴らし、あるいは恐怖から解放されて、かりそめの満足感と安心感に浸る。この非道なスケープゴート・メカニズムの中で想起されたのが「十字架の男」、贖罪の山羊イエスだった。だが、ダントンはロベスピエールも問題に気付きはしたが、それ以上には進めなかった。

「宿命論書簡」のコアの部分がドラマのテキストに反映されているにもかかわらず、初めに指摘したとおり、従来の研究はこの書簡の重みを極力軽く見ようとする点で一致している。避けられない「蹟き」、人間を操る「得体のしれない力」、*「歴史を支配するぞっとするような宿命論」*、恐ろしいほど変わらない「人間の本性」といったものが何を指すかについて、ドラマ・テキストそのものから読み解こうとする姿勢さえあれば、劇中あれほど明瞭にテキスト化されているスケープゴート・メカニズムに気付かぬはずはない。

にもかかわらず、その指摘がなされないままであることの背後には、ユダヤ人をスケープゴートにして迫害、虐殺した過去をトラウマとして抱えるドイツ人研究者たちの心中に、この問題に出来るだけ向き合いたくない、直視したくない、という無意識の壁があるのではな

いだろうか。人間は自分が思うほど自らの主人ではない，理性や理想よりも情念，意識よりも無意識によって操られる存在である，というのがこの戯曲の最も重要なメッセージであることを思い出そう。

人は見たいものしか見ない，見たくないものは目に入らない。誰の目にもバイアスがかかっている。幸い各個人によっても国民によってもバイアスのかかり方は違う。ドイツ人の目に入りにくいことでも日本人には普通に見えてしまう。そこに外国文学を研究することの意味があり，外国文学研究者にとってのチャンスがある。ドイツ人プロフェッサーの博識と権威の前にひれ伏し，彼らの作った研究の枠組みや言説空間に取り込まれているばかりでは，非ドイツ人としてドイツ文学を研究する意味がない。その呪縛の鎖を断ち切るには，日本人としての自分の感性を信じ，テキストと虚心に向き合うしかない。

### ***Dantons Tod als Leichenschau der Französischen Revolution***

Tomotaka TAKEDA

Das Wort „Menschenrechte“ ist nirgends im Text zu finden. Wohin sind die schönen Schlagwörter „Freiheit, Gleichheit, Brüderlichkeit“ verschwunden?

Im III. Akt heißt es: „Blickt um euch, das alles habt ihr gesprochen; es ist eine mimische Übersetzung eurer Worte. Diese Elenden, ihre Henker und die Guillotine sind eure lebendig gewordenen Reden.“ Zum Beispiel die Gleichheit; das Wort kommt nur einmal vor und zwar als Gleichheit vor dem Tod. Die „Gleichheit schwingt ihre Sichel über allen Häuptern, [...] die Guillotine republikanisiert!“

Wie konnte es dazu kommen? Erstens hat der fanatische Idealismus daran schuld.

Robespierre sagt: „Die Revolutionsregierung ist der Despotismus der Freiheit gegen die Tyrannei.“ Die Freiheit verkehrt sich in ihr Gegenteil. Der leidenschaftliche Freiheitsheld kann sich auf dem Weg zur Verwirklichung des Ideals „in Despotismus verirren“, hat Schiller fast fünfzig Jahre früher in *Briefe über Don Carlos* vorausgesagt. Trotz der scharfen Schillerkritik Büchners beweist *Dantons Tod* die Richtigkeit der Weissagung seines Vorgängers. In dem Drama haben sich Robespierre und die Französische Revolution selbst wie Marquis Posa in der Schlinge der Ver-absolutierung des Ideals verstrickt.

Zweitens ist es der Sündenbockmechanismus, der die schändlichen Ergebnisse verursacht.

Von der Konfrontation zwischen Robespierres Idealismus und Spiritualismus einerseits und Dantons Sensualismus andererseits wird oft gesprochen. Tragisch ist, dass die Grundsätze der beiden Intel-

lektuellen mit der materiell elenden Lebenswirklichkeit des Volkes, das vor Hunger „Totgeschlagen!“ schreit, wenig zu tun haben. Deshalb ist etwas notwendig, das die Revolutionsführer mit dem Volk verbindet. Bekanntermaßen werden Menschen Brüder, indem sie sich gegen die „Feinde“ vereinigen. Und in diesem Drama begegnet man dem Wort „Feinde“ besonders häufig: „Feinde der Republik“, „Feinde der Freiheit“. „Feinde“ ist das effektivste Schlagwort in dem Drama, nicht die Menschenrechte. Aber es kommt darauf an, wer als die Feinde gebrandmarkt werden kann. Jetzt sind es die Dantonisten, weil sie sich dafür aussprechen, das Leben zu genießen, also lasterhaft sind, während das arme hungrige Volk gar nicht in der Lage ist, etwas zu genießen, also gezwungenermaßen tugendhaft sein muss. Es hasst die Genießenden wie ein Eunuch die Männer und ihm ist „ein impotenter Mahomet“ Robespierre sympathisch. Die Ersteren sind leicht angreifbar. Lacroix meint, man habe die Hebertisten „aufs Schafott geschickt; aber dem Volk ist nicht geholfen,“ [...] das Volk sei immer noch „materiell elend, das ist ein furchtbarer Hebel. Die Schale des Blutes darf nicht steigen, wenn sie dem Wohlfahrtsausschuß nicht zur Laterne werden soll; er hat Ballast nötig, er braucht einen schweren Kopf.“ Hier handelt es sich um ein typisches Beispiel für die Wirkweise des Sündenbockmechanismus. Die einen Revolutionsführer retten sich, indem sie die anderen zum Opfer bringen, und das Volk lässt seinen gestauten Ärger aus, indem es die ganze Schuld für die jämmerlichen Verhältnisse den epikureischen Dantonisten aufbürdet und sie vernichtet.